

4月5日恒例となった小糸川桜まつりに、沿岸の道路をうずめた人の波となりました。私もその雑踏の中で年々枝を伸ばし、美しい花を咲かせてくれるこの桜の木はいつだれが?とふと思いました。

今から凡そ40年前、このあたりの土地区画整理をされた先人たちが植栽してくれたと聞いております。

改めて思いやりのある先見性に敬意を表し、大いに感謝を致しながら思ったことは…

私達は次の時代に何を残せるのだろうか?

このままですと少子高齢化社会と先輩が心血を注いでつくり育ててくれた商店会や地場産業を荒廃させてしまった現実しか残らない。そんな折、一つの希望として鈴木市長の「市内30分道路」と「きみつフルーツライン」構想があります。流入を予想される3千万の観光客、オリンピック来訪者をこの君津へどう滞留させるかの一策でもあり、恵まれたきみつの立地条件をどう生かすかの策であります。

先月末、市内の関係者と何人かと会い、話を聞き予定される地域を実際に歩き、昨日は鈴木市長さんと直接お会いして、フルーツライン構想を聞かせて頂きました。

ヒントを得たのは「福岡空港から、大分へと続くすばらしいフルーツライン」でした。これからの農業はビニールハウス等を使って栽培する高度な技術、設備を要する方法と、如何に立地条件を活かして人手や高度の技術を必要としないで、規模、収入を拡大できる方法だと思っております。

まずは県道君津鴨川線集落、小糸大鷲から糸川、大野台～東粟倉、東日笠～大岩、正木～豊英と4地区に分けてそれぞれの特徴を持たせたフルーツラインを考えており、総面積は凡そ200町歩を第1次計画の中に想定致して居ります。

フルーツの種別は特に指定しないで、地場産のものを中心に四季折々の果物を楽しんでいただき、この事業によって従来の米作農家の2～5倍くらいの収入が得られる観光農業として喜ばれ、後継者たちに夢と希望を与えるフルーツラインとしたい。

当初フルーツは指定しないか、将来にはブランドフルーツ、フルーツラインの愛称も市民と一緒に考え、名付けて欲しいと思っております。この事業はすでに2年ほど前から始まっており、10町歩まで進んでおりますとのお話でした。

いま日本では規制緩和によって中高年、定年後の人達の働く場が少なくなっており、生涯現役で働き甲斐を求め、これから生活のため働かざるを得ない人達が増加致して居ります。

実際に限界集落の中を歩いてみますと、空き家が目立ち始めましたが、何軒かは都会から定年後、農業をしたいと言う人達が働いて居られました。

フルーツライン沿道を走って思う事は、耕作放棄され雑草の生い茂る様(さま)が多くなって参りました。かつて日本の箱庭のような景観は、田畑によって作られておりました。

放棄農地は40万ヘクタール、農家の平均年齢66歳はTPPと関係なく、このままでは農家も大自然も崩壊します。地元の商業と農業がパートナーとなり両者が連携して次の世代へと『フルーツライン』を残すべきだと市長さんは説いて居られたのだと私は聞いて帰って参りました。